

『三國遺事』の世界觀

— 世界の中心とする世界觀 —*

박 정 의**

目 次

- 1.はじめに
 2. 『三國史記』と『三國遺事』の世界觀の違い
 3. 天帝の血を引く歴代王朝
 4. 世界の中心となる韓半島
 5. おわりに
-

1.はじめに

純粹に民間伝承されてきたのではなく、國家または個人においても意図的に國家民族を保障すべき書かれた「史書」は、その時代の人々を納得させうる世界觀を模索し續けた。日本では、『古事記』『日本書紀』の根本である「天皇」を中心とする世界觀を時代に合わせ創造してきた¹⁾。ここで創造と述べたのは、まさに時代の要求によって「史書」を新しく創造したことを意味する。

史書の内容全てが眞實だけで彩られている、と考える馬鹿はいないはずである。現在の歴史書も、今の時代を保障し未來への方向性を示すべく、そこに虚偽を含む。このことは、金日成一金正日体制を保障すべく書かれた北朝鮮の歴史書²⁾を例に挙げるまでもないだろう。過去に遡れば遡るほど、それは顯著といえる。歴史を研究する者は、史書をろ過にかけ、眞實だけを抽出し、虚偽を捨る。しかし、これでいいのだろうか。虚偽の部分に何ら価値はないのであろうか。ここでは、眞實・虚偽に關係なく嘘・眞全てを含め、史書全体の意味するところを、その時代の思考世界を追求しようと思う。即ち、嘘にも重点をおくものである。当時、何故嘘をつく必要があったのか、そこに当時の人々が求めた何かが隠されているのではなからうか。この中でも今回はそこに自國・民族を保障した世界觀を追求する。つまり、嘘が嘘で、眞が眞だけでなく、眞が嘘で、嘘が眞でもある思考世界から、当時の人々が追い求めた世界觀を考える次第である。

古代中國の一元帝國主義的世界觀、つまり中國を世界の唯一中心とする世界觀を模倣し、韓半島を

* 이 연구는 2003학년도 원광대학교 교내학술연구비의 지원에 의하여 이루어진 것임.

** 圓光大學校 日語教育學科教授 日本學

1) 朴正義(2001年)「天皇を保障した『古事記』」『日本學報』第46輯 韓國日本學會。

2) 「1866年金日成主席の曾祖父金膺禹先生はじめピョンヤンの人民、『シャーマン』号を大同江に撃沈」(鄭晉和編1992年)「朝鮮史年表」雄山閣 p.45)

その世界に取り入れ、「天皇」を世界の秩序の中心とする世界観を「古事記」が完成した。当然そこには中国が排除されるが、天皇を中心とする律令國家の完成によって、当時の日本人が十分に納得し得るものであった³⁾。しかし時代の変遷と共に、天皇も仏教に歸依する仏教隆盛時代を迎え、すでに仏教を無視したうえでの世界観は納得しえるものではなくなった。そこで中世にはいと、仏教を受け入れた「三國(天竺・震旦・本朝)世界観」をもとに、アマテラス=大日如來とした上で、アマテラスに通じる「天皇」を完成し、日本國を保障した。さらに、近代に入っても、西洋の自然科学的世界像を踏まえたうえでの「三大考」は、神代の正統性を主張することによって、天皇を中心とする世界観を保障し続けた⁴⁾。

ならば、韓半島はどうであったか。中國に對抗する古代の強大國家高句麗は、やはり中國を排除した上での高句麗を中心とする一元帝國主義的世界観を確立した。これを物語っているのが、「廣開土王碑文」である。⁵⁾『古事記』より先立つこと300年。

日本は、實權者の目まぐるしい交替は見られるが、「天皇」を世界の中心とする世界観を持つことによって、その國体を維持した民族の存在を保障しえた。その反面、王朝の交替を繰り返して、日本のように「天皇」⁶⁾というものを創造しえなかった韓半島では、韓半島を世界の中心とする「廣開土王碑文」の世界観は、その後の時代には何ら意味をなさないものとなった。『古事記』がその後も意味を持ち続けているとはずいぶん異なる。ならば何を持って、民族の存在を保障しえたのであろうか。これを物語ってくれるのが『三國史記』『三國遺事』である。しかし、『三國史記』は1145年、『三國遺事』ははっきりしないが大体1281年に完成されたもので、その差約150年。この二つの史書は、時代による要求の相違によって、世界観にも大きな違いを見せている。勿論、その筆者の思想性の違いからくる相違もあるだろう。

2. 『三國史記』と『三國遺事』の世界観の違い

『三國史記』の筆者金富軾は、進上文を「孟子は……」と孟子の話から始め、續けて聖上陛下(高麗一七代仁宗)の言葉として「王や王妃の善行と悪行、臣下の忠誠と奸邪、國家の安全と危急、人民の治まり亂れを、全部良くあらわしていないので、後世の戒めの鏡とすることが出来なくなっている」。さらに、「それゆえに、よろしく才・學・識の三つの才に長じた人材を得て、國家の歴史を書き上げて、これを萬世に残して、日や星のように輝かせるべきである」⁷⁾と記し、『三國史記』を書いた目的を述べ、儒教の合理主義をかかげ、その内容面においても荒唐無稽な話を削除した。例えば、『三國遺事』と内容面で比較した場合、『三國遺事』で重要な位置を占めている「壇君神話」は省略されており、

3) 注1)の前掲書

4) 朴正義(2002年)「日本神話における世界観の変遷」日本文化學報 第5輯 韓國日本文化學會 pp.223-239

5) 權五曄(2000年)「한일 건국신화의 세계관」日本文化研究 第3輯 韓國日本學協會 pp.65-75

6) 『古事記』に描かれた「天皇」は、はじめから「天皇」で、それこそ「天地初發時」から續いている「万世一系」の氏族である。さらに「天皇」号の意味は天つまり宇宙の中心であると考えられていた北極星に通じるもので、この「天皇」号を使用することによって、「天皇」を頂点とする世界の秩序が自然・宇宙の秩序に根據づけられたのである。(朴正義 前掲書「天皇を保障した『古事記』」p.373)

7) 『三國史記』進三國史表「故孟子曰。……………伏惟聖上陛下。……………是以君后之善惡。臣子之忠邪、邦業之安危、人民之理亂、皆不得發露以垂勤戒。宜得三長之才、克成一家之史。貽之萬世、炳若日星。」

ただ新羅條で、「これより先に朝鮮の遺民達はここに来て、山谷間に分れて六村を作って住んでいた」⁸⁾と簡単に「古朝鮮」と思われる國に言及しているだけであり。また、『三國遺事』とほぼ同じ記事と思われる部分である新羅の始祖朴赫居世の誕生に對しては次のように異なっている。

『三國史記』: 馬の姿は忽然と消え、そこに大きな卵が残っていた⁹⁾。

『三國遺事』: 馬は空に舞い上がり、そこに大きな卵が残っていた¹⁰⁾。

『三國遺事』では、馬が空に消えていくことから、赫居世が出てきた卵は空から降りてきたことを示し、「人々も天子が天から降りて来た」¹¹⁾と言っているが¹²⁾、『三國史記』では、「馬は空に消える」のではなくただ「消える」だけである。また、『三國遺事』では赫居世は在位六一年に天に戻っており¹³⁾、さらに元々いた六村の祖先が全て天から降りてきた¹⁴⁾と記載されている。このように、『三國史記』はできるだけ荒唐無稽な部分は抑えようと努力している。

それに反し、『三國遺事』は國家事業として編纂されたものでなく、個人によって書かれたため、より自由に國の根本を描くことができたであろう。筆者一然は、紀異第一の始めに中國の建國神話が荒唐無稽な話ばかりであると述べ¹⁵⁾、續けて「(我が)三國の始祖が、みな神異な中から出たとしても、何も不思議なことはなかろう。」¹⁶⁾と、さらに「この『紀異』編を諸編の始めに載せたのも、その意義がここにあるのである」¹⁷⁾といい、荒唐無稽の神話や伝説に重きをおいた。当時は元によって獨立が踏み躪られたという状況下において、民族の獨立、國体の存在の欲求がより烈しい時であった。

さらに、『三國史記』と『三國遺事』の違いを端的に表すのが、自國の王の「死」に對して使用した字である。礼記曲礼に「天子死曰崩 諸侯曰薨 大夫曰卒 庶人曰死」に、「天子」の死に對して「崩」の字、その下の諸侯に對して「薨」の字を使用するとある。『三國史記』は中國の皇帝のみに「崩」の字を使用し、自國の王には「薨」の字を使用することによって、中國の皇帝を自國の王の上に位置付ける。これは中國の皇帝を中心とする世界の中に自國を組み込む世界観といえ、中國を中心とする現實の世界を受け入れることによって、國体の保存を試みようとするものである。このため、『三國史記』が事大主義的史觀を持つと批判される所以である。しかし、これに對し、『三國遺事』は中國の皇帝の死に「崩」の字を使用しているが、自國の王に對しても「崩」の字を使用している。「崩」の字の使用に値する「天子」というのは天下つまり世界を統治する君主の名称である。¹⁸⁾しかし、『三國遺事』は屬國や朝貢國を従える「自國を中心とする世界観」をそこに描いていない。ならば『三國遺事』において「崩」の字を使用する根據は何か。すでに述べたように『三國遺事』が重視する紀異篇、この紀異篇の最初にでてくる「古朝

8) 『三國史記』新羅本紀 始祖赫居世居西干「先是。朝鮮遺民。分居山谷之間。爲六村」

9) 『三國史記』新羅本紀 始祖赫居世居西干「有馬跪而嘶。則往觀之。忽不見馬。只有大卵。……」

10) 『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王「有一白馬跪拜之狀。尋檢之。有一紫卵(一云青大卵)。馬見人。長嘶上天。……」

11) 『三國史記』新羅本紀 始祖赫居世居西干「人爭賀曰今天子已降……」

12) 『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王「時人爭賀曰。今天子已降。……」

13) 『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王「理國六十一年。王升干天。……」

14) 『三國史記』新羅本紀 始祖赫居世居西干「此六部之祖。似皆從天而降」

15) 『三國遺事』卷第一 紀異第一「然而帝王之將與也。……龍交大澤而生沛公。……自此而降。」

16) 『三國遺事』卷第一 紀異第一「然則三國之始祖。皆發乎神異。何足怪哉。」

17) 『三國遺事』卷第一 紀異第一「此神異之所以漸諸篇也。意在斯焉。」

18) 民族文化研究所編(1984年)『三國遺事研究上』嶺南大學出版局 p.7

鮮條」即ち「檀君神話」、さらにその後の王朝の始祖にそれを見いだすことができる。

3. 天帝の血を引く歴代王朝

『三國遺事』は、王曆・紀異・興法・塔像・義解・神呪・感通・避隱・孝善の9篇からなっている。さらにこれを、(一)年表である王曆篇と、(二)歴史的な神異を載せた紀異篇、(三)それ以外の仏教的関係の記事を載せた7篇、と大きく三つに分けることができる。が、(一)の王曆篇は年表の形式を持ち紀異篇を補完するもので、さらに元來獨立した書であったのが『三國遺事』の1篇に加えられたに過ぎないとも言われており¹⁹⁾、また、内容面においても王曆篇は紀異篇と一致した部分が多く、特に紀異篇が重要視する古朝鮮すなわち朝鮮民族全体の始祖壇君が記されておらず、全体として王曆篇は別個のものと考えべきで、結果として(二)(三)の二つに分けられる。重視したいのは『三國遺事』の一番最初に「古朝鮮」が載せられている事実である。年代が一番古いから当然といえばそれまでだが。一然は、古朝鮮を語るのに『魏書』、『古記』、『裴矩伝』²⁰⁾と三書を引用するほど熱心で、そこに中國の始まりとほぼ時を同じくし²¹⁾三國時代より早く、韓半島の最初の國が統一國家・統一民族として開かれたこと確認する。つまり、韓民族の始まりを世界の始まりと同じくし、同じ祖をもつ統一民族であることを示すとともに、統一國家としての國体を保障する。さらに、古朝鮮の始祖壇君は、天帝桓因の子である桓雄の子として誕生する。つまり、壇君は天帝の血を引くものである。『三國遺事』はさらに續け、古朝鮮以後の韓半島中心となる高句麗・新羅・卞韓百濟、また、それ以外に韓半島獨自に建國された北扶余、東扶余、伽耶、駕洛國など全て天または天帝と結付くことによって國が開かれていると記す。以上を『三國遺事』に次のように記されている。

- ・五伽耶：紫色の纓が一つ垂れてきて、六個の卵を(天から)降ろした。(その中の)五個は各邑にかえり、1つはこの城にあって、首露王となり、残りの五個は各々伽耶の王となった。²²⁾

五伽耶の始祖は天から降りてきた卵から生まれた天の子と記す。

- ・北扶余：『古記』にいうには、『前漢書』に、宣帝の神爵三年壬戌(B.C.59年)四月八日、天帝が訖升骨(升紇骨)城大遼の医州の地にあるに降りてきて、五龍車に乗り、都を定めて王と称し、國号を北扶余とし、自ら解慕漱と名のる。²³⁾

天帝自らが、解慕漱と名のり、國を開いたと記す。

19) 末松保和(1964年)『三國遺事解説』學習院東洋文化研究所本 p.2

金東旭(1968年)『三國遺事』韓國의名著 p.142

20) 『三國遺事』紀異第一 古朝鮮條「魏書云。乃往二千載有壇君王儉。……」『古記云。昔有桓因〔謂帝釋也〕庶子桓雄。……』『唐裴矩傳云。高麗本孤竹國〔今海州〕……』

21) 『三國遺事』紀異第一 古朝鮮條 唐姑(堯)が即位してから五〇年たった庚寅に平壤城に都し、はじめて朝鮮と呼び(以唐高即位五十年三國庚寅。都平壤城。)

22) 『三國遺事』紀異第一 五伽耶條 「按駕洛記贊云。垂一紫纓。五歸各邑。一在茲城。則一爲首露王。餘五各爲五伽耶之主」

23) 『三國遺事』紀異第一 北扶餘條 「天帝降于訖升骨城〔在大遼醫州界〕乘五龍車。立都稱王。國號北扶餘。自稱解慕漱」

- ・東扶余：天帝の命によって、北扶余の都を移し國号を東扶余とした。²⁴⁾
解慕漱の子解夫妻が天帝の命(解慕漱が天帝なので、父の命)によって都を移し、東扶余を開國。これは北扶余の續き。
- ・高句麗：始祖朱蒙は、天帝の子解慕漱と河伯の娘との間に出來た子²⁵⁾
また、王曆篇では、始祖朱蒙は壇君の子²⁶⁾。さらに、北扶余では、解慕漱が天帝で、ここでは解慕漱は天帝の子となっておりで、異ってはいるが、天帝の血を引いていることははっきりしている。
- ・新羅：馬は空に舞い上がり、そこに大きな卵が残っていた²⁷⁾。
天から降りてきた卵からうまれた天の子と記す。
- ・百濟：始祖溫祚の系統が東明王(高句麗の始祖朱蒙)から出た²⁸⁾。
王曆篇では、始祖溫祚は東明王の第三子²⁹⁾。
東明王が天帝の孫であるので、溫祚は天帝の曾孫。
- ・駕洛國：「皇天が、私にいいつけてここにこさせ、國を新しく建てて、私にここの君主になれと言われたので、いまここに降りてきたのだ」という聲がした後、空を仰いでみると、紫色の繩が降りてきてた。その繩の端に紅いふるしきがありその中に黄金の卵が六個入っていた。六個の卵が化けて男の子になった。初めに生まれた子を首露といい、國を大駕洛、また伽耶國と称したが、これは六伽耶の1つであり、残りの五人も各々歸って五伽耶の主になった。³⁰⁾
首露王は、天から降りてきた黄金の卵から生まれた天の子。

このように歴代の王朝すべて天帝・天の血を引くものである。これから、李載浩氏は、「中國の『天子』はまさに天下を統治した君主の名称であり、我が國の『天子』はまさに天の子である『天子』ということである。これは我が民族の歴史は天と直結した自主的な歴史であり、決して中國に隷屬した附庸的な歴史でない³¹⁾とのべ、『三國遺事』において、自國の王もに「天子」の死にだけ値する「崩」を使用した理由を説明している。しかし、これだけで「崩」という字を使用し、中國の皇帝に匹敵するもの

24) 『三國遺事』紀異第一 東扶餘條 「北扶餘王解夫妻之相阿蘭弗。夢天帝而謂曰。將使子孫立國於此。汝其避之 [謂東將與之兆也]。東海之濱。有地名迦葉原。土壤膏腴。宜立王都。阿蘭弗勸王移都於彼。國號東扶餘」

25) 『三國遺事』紀異卷第一 高句麗「得女子於太白山南優渤水。問之云。我是河伯之女。名柳花。與諸弟出遊。時有一男子。自言天帝子解慕漱。誘我於熊心下。鴨淥邊室中知之。而往不返。……置於暖處。有一兒。破殼而出。……國俗謂。善射爲朱蒙。故以名焉。……」

26) 『三國遺事』王曆篇「高句麗 第一東明王 甲申立。理十八。姓高。名朱蒙。一作鄒蒙。壇君之子。」

27) 『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王『三國遺事』紀異卷第一 新羅始祖赫居世王「有一白馬跪拜之狀。尋檢之。有一紫卵(一云青大卵)。馬見人。長嘶上天。……」

28) 『三國遺事』紀異第一 卞韓百濟條 「而唐書云。卞韓苗裔在樂浪之地云者。謂溫祚之系。出自東明故云耳。或有人出樂浪之地」

29) 『三國遺事』王曆篇「百濟 第一溫祚王 東明王第三子。一云第二。」

30) 『三國遺事』紀異第二 駕洛國記條「皇天所以命我者。御是處。惟新家邦。爲君后。爲茲故降矣。……未幾仰而觀之。唯紫繩自天垂而着地。尋繩之下。乃見紅幅裏金合子。開而視之。有黄金卵六圓如日者。衆人悉皆驚喜。……而六卵化爲童子。……始現故諱首露。或云首陵 [首陵是崩後諱也]。國稱大駕洛。又稱伽耶國。卽六伽耶之一也。餘五人各歸爲五伽耶主」

31) 李載浩(1983年)「三國遺事に 나타난 民族自主意識」(『三國遺事研究上』民族文化研究所編) 嶺南大學校出版部 p.7

として自國の王をあつかったのであろうか。

4. 世界の中心となる韓半島

ここで、「古朝鮮條」をもう少しみることにする。古朝鮮の始祖壇君は桓因の子である桓雄の子として誕生するが、この桓因に本文では割注「謂帝釋也」をつけて説明している。「帝釋」は言うまでもなく「帝釋天」で、梵天とともに仏法を護る神である。「帝釋天」の梵名は「釋迦提桓因陀羅」といい、本文に書かれた桓因だけでも十分に意味が通じるはずであるにもかかわらず、念をいれて割注「謂帝釋也」をつけ、古朝鮮が仏の意思によって開かれた國、さらに仏によって導かれ護られた國と、『三國遺事』は最初に確認する。

整理すれば、『三國遺事』の「古朝鮮條」が示しているのは、韓半島はその紀元から仏の意志によって開かれた統一國家民族であり、未來永劫にわたって仏に護られる國であることを物語っている。

このため、古朝鮮以後の王朝の始祖との関連から出てくる「天」または「天帝」も、韓民族の祖先として登場した壇君の最初のところで確認されているように、仏教における「天」または「天帝」以外に考えられない。これは、卷第三興法以下に表れる「天」「天帝」の全てが、仏教との関連から語られているという事実からも理解できる。すなわち、あくまで、『三國遺事』での話である。

- ・ 神人がいった。「皇龍寺の護法龍は私の長男であるが、梵王(梵天王)の命を受けて、その寺を保護している。本國に戻って、その寺に九重塔を建てれば、隣國が降伏し、それに九韓(ここでは九夷)も来て朝貢し、王業が長らく太平になるであろう」³²⁾
- ・ 使節を(唐に)使わして献上すると、代宗が見て嘆服し「新羅の巧みは天の造ったものであって人の巧みでない」といい、九光扇をその岩の間において仏の光といった³³⁾。
- ・ 湘公はおもむろに宣律師にいった「師はすでに天帝の敬愛を受けている。聞くところによると、帝釋宮には仏(釋迦)の四十枚の齒のうちの一つである奥齒があるそうだが、我々のため(上帝に)頼んで、それを人間界に下ろして、福とならしめてはどうだろう」。その後、律師が天使とともにその旨を天帝に伝えると、上帝は七日を期限として湘公に送ってくれた。³⁴⁾

ここには、始まりとして、全世界を支配に入れる帝國主義的世界觀は存在していない。その面において『三國史記』と同じである。しかし、壇君以後も、支配者たる王は全て天帝すなわち帝釋天の血を受け継ぐもので、つまり仏の意思によって國が開かれ、その後仏の保護によって國が繁榮することを暗示するものである。また、興法篇以下7篇の仏教関連説話、これは『三國遺事』の構成の實に半分以上になる、これが韓半島が仏に護られていることを實証する。

32) 『三國遺事』卷三 塔像四 皇龍寺九層塔「神曰。皇龍寺護法龍。是吾長男。受梵王之命。來護是寺。歸本國成九層塔於寺中。隣國降伏。九韓來貢。王祚永安矣。」

33) 『三國遺事』卷三 塔像四 四佛山 掘佛山 萬佛山「遣使獻之。代宗見之。嘆曰。新羅之巧。天造非巧也。乃以九光扇加置崑岫間。因謂之佛光 新羅之巧。天造非巧也」

34) 『三國遺事』卷三 塔像四 前後所將舍利「湘公從容謂宣曰。師既被天帝所敬。嘗聞帝釋宮有佛四十齒之一牙。爲我等輩・請下人間爲福如何。律師後與天使傳其意於上帝。帝限七日送與湘公。」

ただ、注目すべき説話が『三國遺事』に残されているので、紹介することにする。「智儼が前日の夜、夢をみると、海東(韓国)に大樹が生えて枝と葉が茂り、それが延びて神州 中國を蔽い、その上に鳳の巢があった。上ってみると一個の摩尼宝珠があり、その光明が遠くまで照していた」³⁵⁾。義湘の話であるが、これは韓半島に仏教が隆盛し世界の中心になることを暗示するものである。そして、天帝の孫である檀君によって統治された韓半島であることを、『三國遺事』が最初に述べたことが、仏教によって繁榮することが約束された地と脈絡が通じる。

5. おわりに

帝釋天の孫である檀君が韓半島の始祖であり、その後王朝は変わるが全て帝釋天の血を引くことから、韓半島は仏の意志によって開かれ統治されてきたことを『三國遺事』は紀異篇で語る。續いて、興法篇以下7篇の仏教説話が、韓半島が仏によって守られていることを実証する。注目すべき説話として載せた「義湘伝教」では、世界のまた仏教の中心として君臨する中國を覆い隠すように韓國が世界の中心となることを暗示する。つまり『三國遺事』がかかれた時点で世界の中心というのではなく、未來を問う「未來に世界中心となる世界観」を持つことによって、『三國遺事』が歴代の王の死に天子にだけ値する「崩」という字を使ったことが納得できるのである。

さらに興法篇以下7篇の仏教関連説話の中に、これについてはここでは詳しく語っていないが、弥勒信仰に関する記事が多くを占め、弥勒信仰=メシア信仰であり、ここに未來メシアの降臨によって韓國が世界の中心となることを保障しているのではないだろうか。

元の侵略を受け初めて國の獨立が犯された時、その時代の人々に未來の希望を持たせ、納得さしえたのであろう。

非常に概論的なものになったが、これからの研究の方向性を示すものとして、ご理解願いたい。

【参考文献】

- ・ 朴正義(2001年)「天皇を保障した『古事記』」『日本學報』第46輯 韓國日本學會
- ・ 朴正義(2002年)「日本神話における世界観の変遷」日本文化學報 第5輯 韓國日本文化學會 pp.223-239
- ・ 權五曄(2000年)「한일 건국신화의 세계관」日本文化研究 第3輯 韓國日本學協會 pp.65-75
- ・ 民族文化研究所編(1984年)『三國遺事研究上』嶺南大學出版局 p.7
- ・ 末松保和(1964年)『三國遺事解説』學習院東洋文化研究所本 p.2
- ・ 金東旭(1968年)『三國遺事』韓國의 名著 p.142
- ・ 金鐘權(1993年)『完譯三國史記』明文堂
- ・ 崔南善(1999年)『三國遺事』瑞文文化社
- ・ 李恩奉(1986年)『檀君神話研究』온누리
- ・ 李基白(1990年)『檀君神話論集』새문社
- ・ 河炫綱(1989年)『韓國中世論』新丘文化社

35) 『三國遺事』卷第四 義解第五 義湘傳教)「儼前夕夢一大樹生海東。枝葉溥布。來陰神州。上有鳳巢。登視之。有一摩尼寶珠」

- ・李佐成・姜万吉編(1999年) 『韓國의 歷史認識上』創作과 批評社
- ・고운기(2001年) 『일연과 삼국유사의 시대』 도서출판 원인

要 旨

日本では、實権者の目まぐるしい交替は見られるが、『古事記』の根本である「天皇」を世界の中心とする世界観を持つことによって、その國体を維持した民族の存在を保障しえた。その反面、王朝の交替を繰り返す、日本のように「天皇」といものを創造しえなかった韓半島では、韓半島を世界の中心とする古代「廣開土王碑文」の世界観は、その後の時代には何ら意味をなさないものとなった。ならば何を持って、民族の存在を保障しえたのであろうか。これを物語ってくれるのが『三國史記』『三國遺事』である。しかし、成立年度に約150年の差があり、時代による要求の相違によって、世界観にも大きな違いを見せている。

『三國史記』は、儒教の合理主義をかかげその内容面においても荒唐無稽な話を削除し、中國の皇帝を自國の王の上に位置付ける。これは中國の皇帝を中心とする世界の中に自國を組み込む世界観という。

『三國遺事』は荒唐無稽の神話や伝説に重き、中國の皇帝と同じく自國の王の死に對しても「崩」の字を使用す。「崩」の字の使用に値するのは「天子」だけで、「天子」というのは天下つまり世界を統治する君主の名称である。しかし、『三國遺事』は屬國や朝貢國を従える「自國を中心とする世界観」をそこに描いていない。ならば『三國遺事』において「崩」の字を使用する根據は何か。これを解決してくれるのが「古朝鮮條」で、それは、韓半島はその紀元から仏の意志によって開かれた統一國家民族であり、未來永劫にわたって仏に護られる國であることを物語っている。さらに續け、古朝鮮以後の韓半島に獨自に建國された國々も、全て天または天帝と結付くことによって國が開かれていると記す。これにより、古朝鮮の壇君以後も、支配者たる王は全て天帝すなわち帝釋天の血を受け継ぎ、つまり仏の意思によって國が開かれたことを明らかにし、さらにその後仏の保護によって國が繁榮することを興法篇以下7篇の仏教關連説話が實証する。中でも、『三國遺事』「義湘伝教條」は、世界の中心として君臨する中國に代り未來韓國が世界の中心となることを暗示する。つまり『三國遺事』がかかれた時点で世界の中心というのではなく、未來を問う「未來に世界中心となる世界観」を持つことによって、『三國遺事』が歴代の王の死に天子にだけ値する「崩」という字を使ったことが納得でき、『三國遺事』が世界の中心としての世界観を持つといえる。

キーワード：『三國遺事』・『三國史記』・世界観・弥勒信仰・檀君・天子・帝釋天

투 고 : 2004. 2. 28
1차 심사 : 2004. 3. 13
2차 심사 : 2004. 4. 3

住 所 : 570-794 全羅北道益山市新龍洞344-2 圓光大學校 日語教育學科
電 話 : 063-850-6523
E-mail : kannan@wonkwang.ac.kr